教科書との対応

三省堂 中2『現代の国語2』p.136～139「漢詩の世界」
光村図書 中2『国語2』p.158～162「漢詩の風景」

次の漢詩（訓読文・白文・書き下し文）と、現代語訳・解説を読んで、あとの問いに答えなさい。

春暁　　孟浩然

春眠不覚暁（ヲ）
処処聞啼鳥（ヲ）
夜来風雨ノ声
花落知多少（ゾ）

（白文）春眠不覚暁　処処聞啼鳥　夜来風雨声　花落知多少
（書き下し文）春暁
春眠暁を覚えず
［　X　］
夜来風雨の声
花落つること知る多少ぞ

（注）春暁＝春の明け方。　春眠＝春の夜の眠り。　覚えず＝気づかない。　処処＝あちらこちら。　啼鳥＝鳴いている鳥。　夜来＝ゆうべから。昨夜からずっと。　多少＝どれほど多く（の花が）。

【現代語訳】

春の夜の眠りは心地よく、［　a　］にも気づかない。あちらこちらから、鳥の鳴く声が聞こえてくる。そういえば、［　b　］、風や雨の音がしていた。花は、［　c　］散ってしまったことだろう。

【解説】

作者の孟浩然（六八九～七四〇）は、唐の時代の詩人で、山や川、田園の暮らしなど、自然をうたった詩を多く残した。この詩は、四つの句から成り、一つの句が五字の詩である。

第一句では、春の朝、寝床の中でまだうとうとしている作者がえがかれる。暖かい春の夜の眠りはあまりに心地よく、空が明るくなったことにも気づかない。第二句では、そんな作者の耳に、あちらこちらから鳥の声が届く。作者はまだ起き上がってはいない。ここまでにえがかれているのは、1目を閉じたまま、耳で感じている春の朝である。

第三句で、詩の場面は前の夜へと移る。作者は、ゆうべ一晩中、風や雨の音がしていたことを思い出すのである。そして第四句で、あの雨と風で、花はどれほど散ってしまっただろうかと思いをめぐらせる。

作者は、散った花を自分の目で確かめてはいない。四つの句のどこにも、目で見た景色は出てこないのである。それでも、雨に打たれて地面に散った花びらの様子が、読む人の心にはありありとうかぶ。のどかな春の朝の心地よさの中に、ふと、2過ぎていく春を惜しむ気持ちがまじる。その小さな心の動きを、わずか二十字で言い表しているところに、この詩の味わいがある。

この詩は、起句・承句・転句・結句の四つの句で組み立てられている。起句で寝床の中の作者をえがき、承句で鳥の声へとつなぎ、転句で時をゆうべへと移し、結句で散った花へと思いをめぐらせて、全体をしめくくる。なお、第一句の「春眠暁を覚えず」は、春の朝、心地よさについ寝過ごしてしまうことを言うことばとして、今もよく使われている。

（漢詩は孟浩然「春暁」　注・現代語訳・解説は創心館オリジナル）

問一 この詩の形式を、漢字四字で答えなさい。

問二 この詩で押韻している字を、訓読文から三つ抜き出し、句の順に書きなさい。

問三 書き下し文の［ X ］に入る第二句を、訓読文の返り点と送り仮名にしたがって、書き下し文に直しなさい。

問四 第一句「春眠不覚暁」を、返り点にしたがって読む順番に、漢字を書き並べなさい。

問五 【現代語訳】の［a］～［c］に入ることばとして最も適切なものを、次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 夜が明けたこと　イ 春が終わったこと　ウ ゆうべから一晩中
エ 今朝早くから　オ どれほど多く　カ ほんの少しだけ

a　b　c

問六 この詩は起承転結の組み立てになっている。場面が大きく変わる「転句」で、作者の思いはいつのことに移っているか。そのことを表す語を、訓読文から二字で抜き出しなさい。

問七 1目を閉じたまま、耳で感じている春の朝とあるが、第一句・第二句で、作者が春の朝を感じとっているものとして最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 窓の外に見える、明るくなった空。
イ あちらこちらから聞こえてくる鳥の声。
ウ 庭に散っている、たくさんの花びら。
エ 寝床まで吹きこんでくる、雨まじりの風。

問八 2過ぎていく春を惜しむ気持ちとあるが、作者は、どのようなことから、この気持ちになったのか。「雨と風」「花」という二つのことばを使って、三十字以上、四十字以内で書きなさい。

問九 題名の「春暁」は、いつのことを表しているか。注を参考にして、次の文のａ・ｂに入ることばを書きなさい。ａは漢字一字、ｂは三字で書くこと。

［a］の季節の、［b］のころ。

a　b

問十 第一句「春眠暁を覚えず」から、作者のどのような様子が分かるか。解説をふまえて、二十字以上、三十字以内で書きなさい。

解答と解説

漢詩 標準① 春暁（孟浩然）

春暁

問一 五言絶句

【根拠】詩は第一句～第四句の四句。どの句も「春眠不覚暁」のように五字。

【読み方の型】形式は「句の数」と「一句の字の数」の二つで決める。四句＝絶句・八句＝律詩、一句五字＝五言・七字＝七言。

【よくある間違い】「五言律詩」……律詩は八句の詩。この詩は四句しかない。／「絶句」だけ……漢字四字で、字の数（五言）まで答える。

問二 暁・鳥・少

【根拠】第一句の終わり「暁（ギョウ）」、第二句の終わり「鳥（チョウ）」、第四句の終わり「少（ショウ）」。

【読み方の型】押韻は、句の終わりの字を音読みして、ひびき（母音）がそろう字をさがす。五言は偶数句の終わりが基本だが、第一句の終わりもふむことがある。

【よくある間違い】「鳥・少」の二つだけ……第一句の「暁」も「～ョウ」のひびきで、そろっている。／第三句の「声（セイ）」を入れる……絶句の第三句（転句）の終わりはふつう韻をふまない。

問三 処処啼鳥を聞く

【根拠】第二句の訓読文「処処聞ク二啼鳥ヲ一」。

【読み方の型】返り点のない字は上から読む。二点のついた「聞」はとばして、「啼」「鳥」と読み、一点のついた「鳥」まで来たら、二点の「聞」にもどる。送り仮名（ヲ・ク）は書き下し文ではひらがなにする。

【よくある間違い】「処処聞く啼鳥を」……返り点を無視して上から読んでいる。／「処処啼鳥ヲ聞ク」……書き下し文では送り仮名をひらがなに直す。

問四 春眠暁覚不

【根拠】第一句の訓読文「春眠不レ覚エレ暁ヲ」と、書き下し文「春眠暁を覚えず」。

【読み方の型】レ点は「すぐ下の一字を先に読んでから、一字上にもどる」しるし。「不」「覚」をとばして「暁」を読み、「覚」↓「不」と一字ずつもどる。

【よくある間違い】「春眠覚暁不」……レ点が二つ続くときは、いちばん下の「暁」から順にもどる。

問五 a ア　b ウ　c オ

【根拠】a＝第一句「暁を覚えず」（注：暁＝明け方）。b＝第三句「夜来」（注：ゆうべから）。c＝第四句「多少」（注：どれほど多く）。

【読み方の型】現代語訳の穴うめは、訳の文がどの句のどの語にあたるかを先に決め、その語の注を見る。

【よくある間違い】bに「エ　今朝早くから」……「夜来」の「来」は「～から（ずっと）」の意味。／cに「カ　ほんの少しだけ」……今の日本語の「多少（少し）」とはちがい、ここは「どれほど多く」。教科書によっては結句を「花落つること知んぬ多少ぞ」「花落つること多少なるを知らんや」などと読むが、意味は同じ。

問六　夜来

【根拠】第三句（転句）「夜来風雨ノ声」。解説の第三段落「詩の場面は前の夜へと移る」。

【読み方の型】絶句は、起句（うたい起こす）→承句（受けつぐ）→転句（場面を変える）→結句（まとめる）。転句では「時」「場所」「見るもの・聞くもの」のどれが変わったかをさがす。

【よくある間違い】「風雨」……風雨は思い出した音の中身。いつのことかを表すのは「夜来」。／「春眠」「暁」……第一句（起句）の語で、まだ朝の場面。

問七　イ

【根拠】第二句「処処啼鳥を聞く」。解説の第二段落「作者の耳に、あちらこちらから鳥の声が届く」。

【読み方の型】「見る」「聞く」など、作者がどの感覚で景色をとらえているかを、句の中の動詞（ここでは「聞く」）で確かめる。

【よくある間違い】ア……第一句は「暁を覚えず」で、明るくなったことに気づいていない。空を見てはいない。／ウ……散った花は第四句で作者が想像したもので、目で見てはいない。／エ……風雨は第三句で、ゆうべのことを思い出したもの。

問八　（例）ゆうべの雨と風で、花がどれほど散ってしまっただろうかと思いやったこと。

【根拠】第三句「夜来風雨の声」と第四句「花落つること知る多少ぞ」。解説の第三段落「あの雨と風で、花はどれほど散ってしまっただろうかと思いをめぐらせる」。

【読み方の型】心情の記述は「何があって（できごと）」→「どう思ったか（心情）」の順で組み立てる。ここでは、できごと＝ゆうべの雨と風、思ったこと＝花が散ったかと思いやったこと。（採点：①雨と風、②花が散ったかと思ったこと。二つで正解、一つは部分点）

【よくある間違い】「花が散ったのを見たから」……作者は花を見ていない。想像している。／「雨と風がこわかったから」……詩にそのような気持ちは書かれていない。

問九　a　春　　b　明け方（「夜明け」も正解）

【根拠】題名の注「春暁＝春の明け方」。第一句の「暁を覚えず」も、明け方になったことに気づかないという意味。

【読み方の型】漢詩の題名は、詩の「時」や「場所」「できごと」を表していることが多い。題名の一字一字（春＝季節、暁＝時間）を注で確かめる。

【よくある間違い】bに「夜」「夜来」……「夜来」は第三句で思い出しているゆうべのこと。作者がいるのは明け方の寝床の中。／bに「朝」だけ……三字の指定なので「明け方」と書く。

問十　（例）春の夜の眠りが心地よく、明け方になっても目が覚めない様子。

【根拠】第一句と、解説の第二段落「暖かい春の夜の眠りはあまりに心地よく、空が明るくなったことにも気づかない」。

【読み方の型】「覚えず」は「気づかない」（注）。何に気づかないのか（暁＝明け方）、なぜか（春の眠りが心地よい）の二つを入れて書く。「～様子。」で終わる。（採点：①眠りが心地よい、②明け方に気づかない。二つで正解）

【よくある間違い】「暁のことを覚えていない」……ここの「覚ゆ（覚える）」は「記憶する」ではなく「感じる・気づく」の意味。／「眠れなかった様子」……反対の意味になっている。